

## おじさんの「かわいい」生存戦略 －老いに関するフェミニスト老年学的視座からの一考察 中山佳子

### 1 はじめに

「かわいいおじさん」、と呼ばれる人がいる。元プロボクサーの具志堅用高や政治家の麻生太郎<sup>1</sup>、セーラー服おじさん<sup>2</sup>の名で知られる一般人の小林秀章氏<sup>2</sup>、この他にも「かわいいおじさん」と呼ばれる人物が存在するのだ。では、彼らはなぜ「かわいい」のだろうか。もしくは、なぜ「かわいい」と意味づけられる必要があるのだろうか。そして「かわいい」という意味づけは、何を可能にしているのだろうか。

「かわいい」と称される彼らは皆、「おじさん」——つまり「老い」の過程にある。「若さ」に価値を置く近代産業社会の価値観（米村&佐々木 2008; Friedan 1993/1995）から成立した若さと老いの二項対立において、「老い」はしばしば生産的でなく衰えた存在として主体性を奪われ社会から排除されると同時に疎まれる存在となる。このように老いが消極的に捉えられる社会で老いた人間が排除されることなく生き延びるための一つの術として、本稿は「かわいい」言説の作用に着目するのだ。つまり本稿は、男性が老いを消極的に感じる過程で主体的に老いを生きる戦略として「かわいい」言説が適用可能であることを、フェミニスト老年学の立場から明らかにするのである。

かわいい言説と老いの過程にあるおじさんの関係性を考察する本稿は、第二節で「かわいい」の言説作用を明らかにする。ここでは、日本社会で多用される「かわいい」について、かわいい言説の一要素である「未成熟さ」と「幼さ/若さ」、そしてこれら二つの要素を併せ持つ「かわいらしさ」に着目しながら考察を進める。第三節では、男性の老いとかわいい言説の関係性を考察する。ここではまず、老いが加齢による絶対的なものではなく、相対的かつ構築的なものであることを明らかにする。また、若さに価値を置く社会において老いが忌避されている現状を示す。次に、忌避されるものとして消極的に捉えられる老いが、かわいい言説の戦略的活用によって積極的な意味を持つことを例示する。他方で積極的な老いへの意味付けは、既存の男らしさをずらしながらも異

性愛規範に依拠する男性のホモソーシャルな絆<sup>3</sup>を固定化する危険性を持つことも示す。

以上のように本稿は、従来女性への作用に主眼が置かれてきたかわいい言説研究の再解釈を行い、男性に「かわいい」言説が作用する際の効用を提示する。また、男性タレントを例に挙げ考察することを通して男性の老いの生存戦略としての「かわいい」言説作用を提示する本稿の試みは、老いの表象の抱える問題を指摘すると同時に規範的な男らしさの攪乱の契機をも示すのである。

## 2 「かわいい」とは何か<sup>4</sup>

「かわいい」は日本社会を席卷している（工藤, 2015; 増淵, 1994; 四方田, 2006）。クールジャパンの甲斐もあってか、今やかわいいはその姿形を変化させながら世界を巻き込んだ現象へと発展している（工藤, 2015）。広範囲で使用されるようになったかわいいという言葉ではあるが、非常に多義的かつ曖昧な意味を持つため一言で定義することは困難である。しかしながら先行研究では、「かわいい」が成熟への拒絶を含意する形での「未成熟さ」、もしくは「幼さ」と結びつく言葉であることが度々指摘されている（阿部, 2015; 工藤, 2015; 篠原, 2010）。ここで、未成熟さや幼さといった要素の上に成立する「かわいい」という言葉が、日本社会において多くの場合肯定的に使用されることを考慮すれば、日本社会そのものが未成熟であることを受容していると解釈できる（四方田, 2006）。また、歌舞伎や落語といった日本の伝統的な文化、すなわちハイカルチャーに対して、アイドルやアニメなどの「かわいい」に纏わる文化を大衆（若者）的かつミーハーな文化、すなわちサブカルチャーと捉えることもある（増淵, 1994; 四方田, 2006）。このような見解は、ハイカルチャーが往々にして男性によって牽引されるのに対して、サブカルチャーは主に女性や子ども、もしくは成熟を拒絶したと看做されるオタクたち（阿部, 2015）等が主導するとされる背景に基づいている。言い換えると、日本社会の文脈においてかわいい要素を含意するサブカルチャーは、成熟のカテゴリーからは外れた未成熟な者たちの文化なのである。

このように「かわいい」の要素として挙げられる未成熟さは、相互相関関係にある幼さ/若さと「かわいらしさ」の関係によって強化される。例えば、顔

の印象に関しては、若さとかawaiiさが相関関係にあることが既に示されている(久島&斎藤, 2015)。また、他者に対する好意は、子供らしい若さに起因する「かわいらしさ」により高まることも指摘されている(工藤, 2012)。さらに吉田(2009)は、二つの要素の関係性を男性視線の観点から考察し、男性が女性の顔立ちにおける魅力の一つとして若さを認識している可能性を論じている。これらの先行研究から、特に女性の顔立ちの魅力という点において、若さがかわいらしさと強力な相関関係にあることが示唆される。

以上のように、「未成熟さ」と「若さ/幼さ」は、かわいらしさを構成する上で必要不可欠な要素と言えるのだ。さらに、これら二つのかわいらしさの構成要素から生じる「かわいい」は、何かに対してかわいいと感じた人物の「かわいいもの」に対する保護欲を引き出し促進する効果を有する(増淵, 1994)。同時に、他者(ここでは特にかわいい他者)を傷つけたくないという意味での非攻撃性を惹起する(會澤&大野, 2010; 宮本, 2011)ある種の安心感を与える作用を持つ。ここで、かわいらしさの構成要素である「未成熟さ」と「若さ/幼さ」によって、他者に保護欲を生じさせたり安心感を与えたりしたことを考えると、かわいい対象と保護欲を抱く人物の関係性は、赤ちゃんと養育者に象徴される関係性と根を同じくすることが明らかとなる。つまり「かわいい」は、他者に安心感を与える特質を持つと同時に、相手の立場を脅かすことがない「従属性」と「劣位」(宮本, 2011)の特性が付されており、他者に対してかわいいと感じる人物の下位(劣位)にかわいい他者を位置づけることを容認するのである。

さらに1970年代半ば以降の「かわいい文化」を考察した宮台・石原・大塚(1993)は、かわいいから「キュート」、すなわち「ロマンチックのように自分と世界の全体を一定の主観的色彩に統一的に彩るのではなく、個々のモノ・こと・人に関する、ある種の〈子どもの〉な属性[...]を志向するもの」(p. 43)という要素に着目すると、これが女の子どうしの対人関係における形式的なコードとしての役割を果たしていると主張した。つまり、相手を決して傷つけることのない「かわいさ」は、コミュニケーション時における表現主体の「内的確かさ」を不必要にし、共感のみを必要とする対人関係機能を確立させたのだ。

このようなかわいいコミュニケーション内において、かわいい存在であることは、他者に対して従順かつ忠実であることをも示す。その意味で、かわいいという感情は男性と女性、先輩と後輩等の権力者（強者）と非権力者（弱者）という二項対立的な権力関係の固定化にも作用するのである（McVeigh, 2000）。以上の議論で示した先行研究は、女性に対する「かわいい」言説の効用について考察したものが大半を占めていた。しかしながら「かわいい」という言葉は女性のみに限られて発せられるものではない。「かわいいおじさん」や「かわいい男子」という言葉に既に内包されるように、「かわいい」は特に高齢者や子どもに用いられるという条件に半ば制限されながらも、男性に対して使用されることもあるのだ。例えば、元プロボクサーで世界王座13防衛の偉業を遂げた日本記録保持者で元WBA世界ライトフライ級王者である具志堅用高は、次のツイートが示すように、現在「かわいいおじさん」として知られている。

具志堅用高以上にかわいいおっさんなんてこの世に存在するの?? ?  
(ゆうま, 2015) <sup>5</sup>

娘に結婚話を切り出されて一週間寝込んでしまった具志堅用高かわいい、スコティッシュフォールドと同じくらいかわいい。(インターネット腐女子, 2016) <sup>6</sup>

具志堅用高はそこらへんのゆるキャラよりもずっとかわいい (mug, 2015) <sup>7</sup>

このように現役選手時代は、必ずしもかわいい人物であるとされなかった具志堅だが、現在ではバラエティ番組への出演やキャラクター化を通して、かわいいと言われる機会が増えている。具志堅自身は、かわいいと言われることを少なくとも番組中は容認しているようだが、特筆すべきは、具志堅が「かわいいおじさん」とであると看做されることで、番組共演者に彼をからかいの対象とすることを許可しているようであることだ。次節で再度検討するが、引退者で

ある具志堅がかわいいという言葉を通してからかいの対象になることを容認する姿は、かわいい言説が彼を番組共演者の下位に置いていることを表しているのである。このように、先行研究はかわいい言説の作用を考察するにあたり主として女性を対象としたが、かわいい言説はジェンダーに関わらず作用しているのである。

本節では、日本社会におけるかわいい言説の作用を考察した。本節の目的は、かわいい文化の否定ではなく、かわいい言説及びそこから生じたかわいいイデオロギーが、日本社会においてどのような作用を果たしているのかを明らかにすることであった。「かわいい」言説は、対象となる「かわいい」存在を劣位に置く作用をもつ。「かわいい」は、この言説作用を通して支配（強者）/従属（弱者）という関係性を成立させているのである。他方、本節ではかわいい言説がどのように男性に働きかけるのかについて十分に論じられなかった。そこで次節では、先述の具志堅の例のように、男性の中でも「老い」の印象を少なからず抱かせる「おじさん」に対する「かわいい」言説の作用を考察する。

### 3 「かわいい」とおじさんの融合

本節では、未成熟さをもたらすかわいい言説が「老いの身体」と結びつくことで、「老い」そのものから抜け出し「若さ」という名の神話（Friedan, 1993/1995）に執着する「おじさん」の姿を明らかにする。さらに若さの神話の下に成立する男性のホモソーシャルな関係性からおじさんが自らを積極的に周縁化することで老いによって一度は失効した男らしさを回復する際に、かわいい言説は如何なる作用を果たしているのかを論じる。

#### 3.1 「老い」の過程における男らしさの喪失

日本の総人口を占める65歳以上の高齢者人口は既に26.7%、75歳以上だけを見ても12.9%と、日本が高齢社会であることは抗いようのない事実である（北川, 2004; 小松 et al., 2001; 内閣府, 2015）。このような状況下で、高齢者のセクシャリティに対する偏見や、それをタブー視する傾向（北川, 2004; 小松 et al., 2001）を筆頭に、エイジズムを内面化した結果と考えられる様々な問題

が現れている。エイジズムとは、ある年齢集団が異なる年齢集団に対して抱く偏見 (Butler, 1969) である。では、エイジズムを引き起こす原点、すなわち、ある年齢層から異なる年齢層へと移行する際に現れる「老い」とは何なのか。ロバート・バトラーはこれを「ある特定の段階でも特定の集団でもないし、資格として定義されるものでもない。たんなるひとつのプロセスである」(Butler & Herbert, 1985/1998, p. 35) と捉えている。また、老いが論じられるとき、高齢化という現象として現れる「社会全体の人口学的な意味での老い」(p. 35) と、「個人」の経験としてのそれとは、区別されなければならないと指摘している (Butler & Herbert, 1985/1998)。本稿で考察する「おじさん」の老いは、後者の「個人」の経験としての「老い」を取り巻く諸相である。個人の経験としての老いについて、ボーヴォワール (1970/2013) は、社会との関連を指摘しながら次のように主張する。

老いが生物学的運命としては超歴史的事実であるとしても、この運命が社会的背景にしたがって多種多様に生きられることは疑いないし、逆に、ある社会において老いが有する意味あるいは無<sup>ノンセンス</sup>意味は、その社会全体の問題に付すのである (p.16)

ボーヴォワールが指摘するように、老いは人口学的な意味を持つ加齢によって絶対的に決定されるものではない。確かに生物学的な加齢現象は万人に訪れる。しかしながら老いとは、加齢を絶対条件として出現するのではなく他者との比較が行なわれる際に相対的に現れるものであり、その「老い」への意味付けは社会状況や文化的背景によって変化するのだ。だからこそ、個人の経験としての「老い」は文化構築的なものとして捉えられるのである。

今日、「個人」の高齢者像は二極化したイメージを有している。吉田&田中 (2004) は、日本社会における老いの認知についての調査を行うにあたり、次の二極化した高齢者像を挙げている。ひとつは、老年期を迎えた高齢者が、社会的役割や身体的な健康、退職による安定した経済的基盤の「喪失」や、今後生活する上で「依存」する者として存在するといったネガティブな側面を強調する「弱者」としての高齢者像 (p. 159)。もうひとつは、豊富な経験や知識

を持ち、老年期の人生に意欲的であると考え「新しい高齢者像」である (p. 160)。このように、老いの姿は衰退か継続的な発達という二極化したイメージのどちらかを付与されているのである。

高齢者イメージが二極化する現状への批判は行うに易しいが、「喪失」もしくは「依存」といった消極的なイメージばかりが前景化し、高齢者が社会的な「問題」としてのみ語られていた80年代初頭、バトラーを中心に高齢者の生産性 (Productivity) を議論することで新たな価値体系が導入されたことは、非常に先駆的であったと言えよう。バトラーは高齢者の価値を見直すにあたり、高齢者の問題が男性研究者によってばかり論じられていた状況を省みて、フェミニストでありジャーナリストのベティ・フリーダンの論考を自らが編著者として携わった『プロダクティブ・エイジング』(1985/1998)に加えている。

その論考の中でフリーダンは、消極的な高齢者のイメージから積極的なイメージへの転換点を高齢者と女性の社会的立場の類似性に見出している。そして労働者たり得ない者を社会が疎外するという、生産/再生産至上主義的な社会構造は女性だけではなく高齢者をも疎外することを指摘した。また、フリーダンは『老いの泉』(1993/1995)の中で、産業革命以降の資本主義社会においては、生産力と等価性を持つ「若さ」に大きな価値を与える「若さの神話」が生まれたことを明らかにしている。若さの神話は、老いを「若さの頂点から急激に衰えること」と捉えるため、逆説的に「老いの神話」を生み出す (Friedan, 1993/1995, p. 148)。また、「若さの神話」の価値体系内において「老い」は若さの喪失と看做されるため、社会にとって価値ある者として存在するためには、老いを拒絶もしくは忌避しなくてはならないと考えられるのだ。肌ハリがあり、白髪混じらない毛髪等の外見上の美しさや、生産性を誇示する「若さの神話」は、皺やシミといった外見の変化や身体的な衰えによる他者への依存といった「老いの神話」の消極的な側面を浮き立たせる (Friedan, 1993/1995)。ここで考慮すべきは、フリーダンの想定する「若さの神話」における生産性の問題が、特に男性に関わっていることだ。

フリーダン (1993/1995) の主張する若さの神話における生産的人間とは、主として労働主体となる可能性が比較的高い若い男性である。なぜなら彼らは、他者に依存的ではないことを示す「男らしさ」の支柱の一つを守るために

若く生産的であり続ける必要があるからだ。その意味でフリーダン (1993/1995) は、若さの神話から社会的に一方向的に排除される老年期においては、女性よりも男性の方が老いの受容に困難を覚えると主張している。特に、退職という老年期のスタートを彷彿とさせるライフイベントは、女性よりも男性にとって「深い心の傷になると予想されるもう一つの〈喪失〉」(Friedan, 1993/1995, p. 162) となるのである。なぜなら、彼らは退職を期に生産者としての姿を喪失すると同時に、若さの神話のもと生産者として固く守り続けてきた男らしさをも喪失してしまうからだ。退職に伴って強く意識される老いは、彼らが生産者という強者の側から、生産に依存する者、つまり弱者の側へと排斥されることを想起させるのだ。このことから、性役割分業のもと半ば家庭に閉じ込められ複雑なライフコースを従属的にしか歩めなかった女性とは異なり、労働主体となり得た男性は、自らの社会的立場が揺らぐことに免疫がないため、「権力を喪失したら (あるいは喪失した時)、〈存在しないとみなされる人間〉になるのではないかという恐怖」(Friedan, 1993/1995, p. 190) を抱かざるを得ないのだ。若さの神話を内面化することで男らしさという強力な支配的価値を固持していた男性たちが、退職を期にそれを突然剥奪される経験は、彼らに圧倒的な喪失感を抱かせ、退職後も「懸命に支配的立場にしがみつ」(Friedan, 1993/1995, p. 203) こうとさせるのである。

このように、自らに喪失感情を抱かせる〈高齢者=無能〉とする消極的なモデルからの脱却を望むならば、老いを衰退ではなく発展と捉えて行動することが必要であるとフリーダンは主張する。そして、若さの神話を攻略しなければ老いを積極的に肯定する新しいイメージの創出は不可能だと論じている (Friedan, 1993/1995, p. 323)。このようなフリーダンの主張とは裏腹に、若さの神話を内面化した男性は、社会的立場を弱者の側へと位置づけられることから逃れるために、老いによって剥奪された男らしさの回復を試みることがあるのだ。フリーダンの主張するように、加齢現象を自己肯定的に捉え直すことで、老年期に対する消極的価値観を積極的なものに転換し、老いを受容することは可能であろう。しかしながら、男性が若さの神話に執着する姿からも明白であるように、老いは自己肯定だけでは逃れられないものでもあるのだ。なぜなら先述の通り、老いはフリーダンが想定したような加齢によって絶対的に決



定づけられるものではなく、常に他者を介する相対的で社会構築的なものであるからだ。

以上の議論で示したように、加齢によってのみ老いを捉えてはならないこと、老いは文化構築的なものであるからこそ、その意味付けが変更可能であることに留意した上で、老いが男らしさとどのように密接な関係を築いているのかを考察することが必要となる。なぜなら先述の通り、男性が老いを恐れる理由として「男らしさ」の喪失が挙げられるからだ。老いと男らしさの関係性は、彼らの「外見」に如実に現れる。例えば、日本社会に顕著に現れる例ではあるが、ある一定の年齢に対してではなく、容姿に対して老いのスティグマが貼られる場合がある。薄毛、すなわち、「ハゲ」(須長, 1999) に対してである。薄毛になった男性へのインタビュー調査を通して、彼らが対峙する社会からの眼差しを考察した須長 (1999) は、次のようにハゲと男らしさの関係性を論じている。

髪が薄く地肌が目立つということの一つの目印として、彼らを〈マイノリティ〉の位置に押し込め、常に攻撃を仕掛ける。**これらの行為は相対的に自らの優位性を確保すると同時に攻撃している自分を、“男らしい”自分として提示する実践**でもあるのだ。(p. 196, 太字筆者)

薄毛の男性が「〈マイノリティ〉の位置に押し込」まれているという考察からは、彼らが毛髪に関して既に周縁化された存在となっていることが示されている。須長の議論をもとに岡井 (2009) が、「ハゲという外見的、身体的特徴がその序列化の大きな要素である」(p. 25) と指摘するように、薄毛の男性が周縁化されているという事実は、逆説的に髪がある状態は男らしさを象徴し、男性のホモソーシャルな関係性において規範的であることを示している。また、男性のホモソーシャルな関係性の中で「男らしさ」を確認し合う際に、「相対的に自らの優位性を確保すると同時に攻撃する」(須長, 1999, p. 196, 傍点筆者) 形で頭髮の有無によって優劣を決定する境界線が暫定的に再生産され続けていることから、ハゲか否かには明確な基準はなく寧ろ、相対的なものとして認識されていることが分かる。

また、頭髪の有無に由来する男らしさの規範は、若さ/老いの問題との相関性をも有している。主にヤングアダルト男性層をターゲットとした人気健康雑誌Tarzanは、俳優の温水洋一（当時43歳）を「最強の老けビジュアル系」（p.15）と称し2007年7月25日号の表紙に起用した。温水が頬杖をつき、読者を見据えるバストアップ写真の左側には特集タイトルである「30歳からの『老けビジュアル』注意報！」の文字が大きく記され、雑誌タイトルの上にはサブタイトルとして「ココロもカラダも見た目も若く！」と記されている。このように薄毛の温水の容姿に対して、老いと若さが対立項に置かれた文字が並ぶことで、表紙上での「老けビジュアル=薄毛=注意が必要である」という方程式が成立しているのだ。ここに、老いてはいけないという「若さの神話」を構築していることを確認できる。

さらに同誌は、薄毛によって老いを連想させてきたと語る温水のインタビュー記事に続く形で、加齢が人間の身体にきたす年齢変化の提示と、それを超克する方法を記載している。加齢による身体変化には、近年洗濯用洗剤のコマーシャルなどでも取り沙汰される「加齢臭」も例として挙げられており、記事の説明的見出しには「女性が嫌う男性特有のニオイ」（p.36）という異性からの眼差しが含意されている。加えて、異性からの眼差しは「オヤジのここが許せない!!美人OLのホンネトーク。」（p.59）という企画でも引き続き意識されている。この企画は、有名企業に務める6人の美人OLがオヤジに対する辛辣なコメントを寄せる中で、「たとえオヤジ年齢になっても、若い女性に愛されたい」（p.59）という男性の願望を叶えるための改善可能点を示すことが目的とされている。彼女たちの会話では、加齢臭や口臭、権力を誇示する態度などがオヤジの欠点として挙げられる他、年齢とは関係なく、清潔感や身体的なだらしなさも指摘されており、オヤジ=老いのイメージが構築されていることが伺える。

同企画はオヤジが異性から「モテる」ためのアドバイスを与えることを目的としている点において異性愛規範を踏襲している。このことから、同企画が家父長制的な権力関係構図を想定していると考えられる。つまり、想定される読者たるオヤジは、シクスー（1975/1993）が指摘するような二項対立的な男女の関係性の中で、常に能動性を司り自身の特権を保持しているはずなのであ

る。しかしながら同企画における「オヤジ」とコメンテーター役である「美人OL」の関係性をみると、支配（強者）—従属（弱者）の権力関係が逆転していることが分かる。これは、男性が老いたオヤジとして、男らしさで結ばれるホモソーシャルな関係性の周縁に置かれたことに起因していると考えられる。女性を蔑視するのではなく、逆に女性から煙たがられるオヤジは、「オヤジ=老い=モテない」という不名誉な称号が付与されるため、男性のホモソーシャルな関係性の周縁に置かれるのである。このような男性に対しては、女性も辛辣なコメントを加えることが可能となるため権力構造の逆転が起きたのだ。このようにして老若という権力の反転構造は、男女という二項対立的権力関係をも逆転させる力を獲得するのである。その結果、男性の男らしさや男性のホモソーシャルな関係性、異性愛規範内での男女関係における権力関係に対して「老い」が大きな影響力を持つと信じられ続けることで、老いの神話は補強され続けていくのである。

### 3.2 男性の老いに対する「かわいい」言説の効果

フリーダン（1993/1995）が論じるように、若い男性が評価基準として措定される若さの神話が存在する限り、おじさんは自らの老いに対して消極的な意味しか見出すことが出来ない。それではかわいい言説は何にして、社会からの排除や主体性の剥奪といった消極的な意味付けではなく、社会への継続的かつ主体的な繋がりを可能とする積極的な意味づけをする「老い」の生存戦略と成り得るのか。先に提示した元ボクサーの具志堅用高の場合、ボクサー時代に培った男らしさがかわいい言説によって後景化され、彼をからかう側に対して従属的な場所に位置づけていることが明らかとなった。しかしながら先の分析においては、具志堅に対してどのようにかわいい言説が作用しているのかを例示するに留まってしまった。そのため、本節では、引退後に男らしさを誇示し合う土俵から一時的に退いた具志堅がかわいい言説内部へと移動したことで周囲に対していかなる影響を及ぼしているのか、また、いかにして彼の老いが肯定的に捉えられているのかを再度考察する必要がある。そこで以下の議論では、具志堅の例を筆頭に、かわいい言説がおじさんに作用するもしくは内面化された際にどのようにして彼らの老いを積極的なものへと変容させ、「老い」

を排除しようとする若さ重視の社会における生存戦略となり得ているのかを検討する。

かわいい言説は、如何にしておじさんの老いに積極的な意味を与えるのか。それは以下のように、二つの異なる作用のいずれかによってもたらされると考えられる。第一の作用は、具志堅の例に該当するものだが、他の男性の男らしさを肯定するために必要とされる道化役になることを可能にする作用である。第二に、老いを戦略的に捉えかわいい言説を内面化することで自ら去勢された姿を**演じ**、若さの神話の中で規範的な男らしさの周縁に自らを位置づけることを可能とする作用である。これら二つのいずれかの作用がおじさんに働くことで、老いに積極的な意味付けを行うことが出来るのだ。それと同時に、他者からの承認、ひいては男性のホモソーシャルな関係性内部からの承認を得ることで、一度は喪失した男らしさを再構築することが出来るのだ。

まず、第一の作用について論じる。先述の通り、かわいい言説は日本社会に生きる「かわいいもの」への効果として、女性を従属/弱者の立場に位置づける。これと同様の作用が老いた男性にも作用するのである。例えば、先の例に挙げた元プロボクサーの具志堅用高は、タレント活動を始めた当初どのような心境であったのかを尋ねる質問に対して次のように答えている。

そうですね。最初は戸惑いもありましたよ。年齢も僕より若い方ばかりだったし、性格とかも分からないから「変なこと言って怒らせないかな？」とか考えたり。その時はボクシングの話をしたくなかったんです。**タレントとして生きていくなら、ボクサーとしてのキャリアを捨てなきゃって。**(具志堅, 2015, 太字筆者)

上記のように、彼がボクサーとしてのキャリアを捨てようと自覚的に行動していたという語りからは、老いとそれによる男らしさの喪失を確認することが出来る。「で、いざボクシングを辞めたら自分の中に何もなくてさ。だから、ふさぎこんじゃってね〜。」(具志堅, 2015) と具志堅自身が引退後について語るように、プロのアスリートにとって競技引退は一般人にとっての退職と凡そ同義であり(豊田&中込, 1996)、「喪失」という名の老いを体感する出来事であ

あるといえる。特にボクシングは荒々しい野生を感じさせるスポーツであり、伝統的に女性的であると考えられるものからは切断されたスポーツである (Boddy, 2008/2011)。引退後「自分の中に何もな」という具志堅の言葉から、ボクシングによって強化されてきた彼の男らしさが後景化されていることが示される。それでは具志堅は、いかにして彼に喪失をもたらした老いに積極的な意味を付与することが出来るのか。それは彼がバラエティ番組等への出演時に、芸人を含む共演者にイジられることで小馬鹿にされているような印象を抱くのではないかという質問に対する次の答えから明らかとなる。

やっぱりね、そういうのは**辛抱なんですよ**。そこで自分が熱くなったりしちゃったらそこで終わりなんですよ。(具志堅, 2015, 太字筆者)

具志堅が他の男性からイジられている、すなわちからかわれているという事実は、彼が既に男性のホモソーシャルな関係性の中で下位に置かれていることを意味している。具志堅にインタビューをする男性インタビュアーによる「具志堅さんほどのボクサーとしての勲章があれば、ボクサー具志堅用高としても生きて行けたのに、それを捨ててバラエティ番組でイジられ役に徹した。権威にしがみ付きたいのが人間の常なのに。」(具志堅, 2015) という質問から明らかのように、「イジられ役」は男らしく優れた権威側の対極に位置するのだ。インタビュー中で指摘されるように、具志堅のバラエティ番組での活動が増加したきっかけとも言えるフジテレビ系バラエティ番組「クイズ! ヘキサゴンII」出演時(2010-2011)には、勉強をしてきたと宣言するも最下位意であったことからイジられる姿や、「私が今日のおバカです」と書かれたプラカードを頭から下げさせられる姿を確認することが出来る(同番組2011年6月15日放送)。つまり、ボクサー時代に培った男らしさを後景化した時点で、彼は薄毛の男性と同様に、他の男性の男らしさを誇張するための比較対象と化するのである。

ここで、比較対象となり男らしさを後景化することは消極的に捉えられるかもしれない。しかしながら比較対象となることこそが、彼の老いに対して積極的な意味を与えるのだ。前節で確認したように彼は度々かわいいと形容され

る。ここでのかわいい言説は、具志堅彼を周縁ではなく男性のホモソーシャルな関係性内部の道化役として、男同士の絆を強化するよう作用する。なぜならかわいい言説は、支配（強者）—従属（弱者）の権力関係を固定する作用を持つからである。具志堅が「かわいいおじさん」と称されることは、男らしさの剥奪を印象づける。しかしその内実は、かわいい言説内部に身を寄せることでボクサー時代に培った男らしさを後景化し、他の男性の男らしさを証明する際に必要となる程度の低い男らしさを持つ男性として存在し続けることを可能にしているのだ。具志堅のように後景化された男らしさを持つ男性は、他の男性に優越感を与える。そのため具志堅は老いているにも関わらず再び男性のホモソーシャルな関係性の内部に掬い上げられるのだ。こうして彼は自らの老いに積極的な意味を付与できたのである。

他方、第二の作用である、男性自らかわいい言説内部で男らしさからの積極的な周縁化を行い、男性のホモソーシャルな関係性の内部へと吸収される方法を実践した男性としては、「セーラー服おじさん」が例に挙げられる。セーラー服おじさんとは東京都在住、現在 55 歳の小林秀章という男性である。「キモかわいい」おじさんと形容されることが多々ある小林氏は、自らがセーラー服姿であることや今後も続けていくか否かについての質問に対して「じいさんになってもセーラー服おじさんをやっているほうが面白いですよ」（小林秀章, 2014, July 23）と語っている。古賀（2009）は、女の子たちが「年長者やグロテスクなものを『かわいい』というときには、社会的上位者の上位性や気味悪い存在の気味悪さを矮小化して、自分の精神的な力関係を転倒しようとする潜在意識の働きとみることもできる」（p. 211）と指摘し、「女の子たちによる」無意識的な「かわいい」のつぶやきによって「既成のヒエラルキーが転覆されている」（p. 211）と論じている。古賀（2009）の主張からは力関係の転倒によって女性が地位の上位性を獲得可能とすることが示唆されている。しかしながらかわいい言説の作用は、既成のヒエラルキーの転覆に留まらず、「キモかわいい」おじさんが老いに積極的意味付けを行う上でも、好機となることが次の引用から明らかとなる。彼は、若い世代を中心に「会うと幸せになれる存在」と位置づけられているのだが、翻って自身がセーラー服の着用を始めてから運気の向上を感じているのか、という質問に対して以下のように答

えている。

『写真、一緒に撮ってください』と女子中高生に言われて、『ありがとうございました。握手してください』と笑顔で感謝される。そしてハグしても許される。普通に道を歩いていて、そういうことってありえないじゃないですか？ **みんな、警戒を解いちゃう。中身はおっさんということに気がついてない（笑）。じつは本人が一番幸せになっているのではなかるうか**とと思っているくらいです。」（小林秀章, 2014, July 23, 太字筆者）

趣味でセーラー服を着用している小林氏だが、「中身はおっさんということに気がついてない（笑）」と明言するように、彼はセーラー服の着用が、特に女子中高生の警戒を解いている点に自覚的である。制服の一種であるセーラー服は女子高生の記号である（古賀, 2012）と同時に、その記号性によってかわいい言説が反映される場所でもある。つまり、彼は女子高生が警戒心を解くように、セーラー服の持つかわいい言説の無害性の作用を通して、積極的に自らを男らしさの周縁へと位置づけようとしていることが伺えるのだ。彼自身、セーラー服の記号性について次のように語っている。

セーラー服は、“かわいい”という記号の組み合わせでできている。その記号さえ踏襲してたら、私でもかわいくなれちゃうのではという、逆の問いかけだったんです。その違和感が面白いんじゃないかって。（小林秀章, 2014, September 7）

彼は回答の中で「かわいい」と「私」を対極に据えている。彼は、「私」、すなわち老いたおじさんのままでは、若さの神話の中を生きられないことに自覚的である。そのため、男らしさの対極にあり「違和感」を感じさせる「かわいい」という記号を利用しているのだ。本稿は、小林氏個人の行動を変態的であると批判するものではない。そうではなく、若さの神話を信仰する社会において、如何にして自らの老いに対する積極的な意味付けが可能であるかを究明す

ることを目的としているのだ。

かわいい言説が作用するセーラー服の着用と「会うと幸せになれる」というジックスが実しやかに拡散されることで、彼には女子中高生からハグや握手を求められる機会を与えている。これは、彼が老いによって喪失を経験した消極的な人物としてではなく、主体的に女子高校生という若者の文化の構成要素の一つとして存在することを示していると考えられる。小林氏はかわいい言説の積極的内面化を通して若者文化の一部となり、他者からの容認を獲得したのである。換言すれば、規範的な男らしさから逸脱し、自らの手で自らを戦略的に去勢した姿を演じることで、老いに対して積極的な意味を付すことが出来たのだ。

ここで注意すべきは、小林氏もまた、異性愛規範の中を生きているということだ。確かに彼は「かわいい」言説の内面化によって自らを規範的な男らしさの周縁へと位置づける。この意味で彼は規範的な男らしさの攪乱を行っていると言えるのだ。しかしながら彼が「女子高生」の視線を気にする姿勢、また彼女達に人気である姿を主張する姿勢から明らかであるように、かわいい言説の積極的内面化は、男らしさの攪乱と同時に、男性のホモソーシャルな関係性への復帰を結果的に可能にしていることが分かる。つまりここで小林氏が若者、特に女子高生から獲得した容認は、彼がホモソーシャルな絆へと復帰するための足がかりとなっているのだ。小林氏は、規範的な男らしさの周縁で、異性からの人気を集める、極端に言い換えると異性から「モテる」ことを可能にする新たな男らしさを打ち出しているのである。そうすることで、彼は男性のホモソーシャルな関係性へと行きつ戻りつすることの出来る男性として自らを位置づけることを可能にしたのだ。このようにかわいい言説をもって新たな男らしさを獲得することで、老いの身体に積極的な意味付けを行うことが出来たのである。以上の結果として、現段階においては男性から容認を得ることこそが、男性の老いの積極的な意味付けの最終的な目的であることが明らかとなった。これこそが、未だに若さを進行する社会において男性が老いを積極的に生きるために必要不可欠なのだ。

超高齢社会にも関わらず、若さの神話を信仰し続ける日本社会において、「老い」は未だ忌避すべきものという消極的なイメージを有している。だから



こそ老いの身体を持つ男性たちは、自らに積極的な意味を付与する生存戦略を必要としているのだ。そしてその戦略は、婉曲的にであれ男らしさを再び獲得し、男性のホモソーシャルな関係性へと復帰することを可能にしなければならないのだ。かわいい生存戦略は、自らの老いの身体に「かわいい」言説を書き込む行為、すなわち戦略的去勢である。その行為を表面的に見れば、非常に攪乱的な行為であるといえよう。しかしながら先述の通りこの戦略的な去勢を介した「生存戦略」は、男性のホモソーシャルな関係性の内部へと収斂されてしまっているのが現状だ。このようにある程度の限界を呈しているかわいい生存戦略ではあるが、戦略的去勢が継続されることで権力関係の構築を流動的なものにするかわいい言説の作用が働き続けるという点において一つの攪乱的な可能性を有していると言えるのではないか。つまり、かわいい生存戦略により、男性の老いの身体に対する「男らしさ」の意味づけ直しが今後継続して行なわれることで、若さや異性愛規範にとらわれることのない多様な「男らしさ」の提示が可能となり、それに伴って男性の老いに対する積極的な意味付けも多様化していくと考えられるのである。

以上のように、若さの神話を信仰する社会において一度は老いによる男らしさの喪失を経験した男性も、これら二つのかわいい言説作用を戦略的に自らの老いの中に取り込むことで老いに積極的な意味を見出すことが出来るのだ。

#### 4 おわりに

本稿は、はじめに日本社会における「かわいい言説」の言説作用を考察し、かわいい言説は、未成熟さと幼さという要素を併せ持ちながら、支配（強者）—従属（弱者）の関係を暫定的に強化する作用を持つことを明らかにした。次に、老いの過程にいる男性に対して、かわいい言説が如何なる作用を持つのかを考察した。その際、老いが加齢による絶対的なものではなく、他者を介して構築される文化的なものであることを示した。その上で、若さの神話を信仰する日本社会の中で、老いの過程において男らしさの喪失を経験した男性は、老いを消極的に捉えがちであることを明らかにした。そして男性が如何にして老いに積極的な意味付けを行うのかを「かわいい言説」の作用の面から例示した。その結果、かわいい言説を戦略的に取り入れることで男性は道化役と

なり他の男性の男らしさを示す補助役となる、もしくは積極的に自らを既存の男らしさの周縁に位置づけることで、男らしさを支軸に据える「若さの神話」をズラしながら、老いに積極的な意味を与えていることが示された。他方で「かわいい」言説作用は、結果的に男性のホモソーシャルな関係を再確認させるものであることも示唆された。以上のように、かわいい言説は、異性愛規範を越えられていないという点で、現時点では一定の限界の存在は拭い去れないものの、老いへの積極的な意味付けを可能にする点で評価できる戦略であることが示された。

若さの神話を信仰する社会においてかわいいは戦略となる。同時に、若さの神話が打ち砕かれた社会においてもかわいいは戦略となりうるだろう。「かわいい」を戦略として採用すべき点は中央に絶対的な権力が存在しない点にある。暫定的な関係性の中で、暫定的にへつらい、暫定的な権力関係を築き、自らにとっての利益を生みだし続ける。これこそが、かわいいという生存戦略の醍醐味なのである。超高齢社会であるにも関わらず、今なお若さに価値を置く日本社会では、このように「生存戦略」が求められる。後続研究として「老い」の多様な生き方の考察を継続しながら、「生存戦略」を必要たらしめるこの社会そのものを問うていきたい。

## Acknowledgments

本稿の執筆にあたり、名古屋大学人文学研究科の松下千雅子教授より、有意義なアドバイスを頂いた。また、英文要旨の作成においては、Ethan Neil Hoffman氏、Ioana Fotache氏の協力を受けた。ここに感謝の意を表する。

## Footnotes

- <sup>1</sup> 麻生太郎がかわいいと称されていることについては、ウェブ上で確認可能である。以下一例をあげる。「『麻生太郎 かわいい』で検索すると心が和むらしい…って本当!?!」 Retrieved December 25, 2017, from <https://matome.naver.jp/odai/2142366205764011901>
- <sup>2</sup> 記事の中で小林氏は、コミックマーケット会場内において「100回くらい『かわいい』って言われています(笑)」と証言している。「【コミケ90】セーラー服おじさん、会社を休んでコミケ来場」 Retrieved December 25, 2017, from <https://www.oricon.co.jp/news/2076702/full/> 他にも、「そして安定のセーラー服おじさん。可愛い…プロってすごい…ピースしてるの可愛い!!」と小林氏を「かわいい」と称するツイートが散見される。 Retrieved December 25, 2017, from <https://twitter.com/hainezum4/status/944869734700400640>
- <sup>3</sup> セジウィックは『男同士の絆』(1985/2001)の中で、同性間の利益の促進を図る社会的絆を意味する「ホモソーシャル」の語を用いながら、強制的異性愛を支軸に据えた家父長制社会における「男性のホモソーシャルな欲望」(Sedgwick, 1985/2001, p. 2)の存在を指摘した。さらに男性のホモソーシャルは、女性蔑視と同性愛嫌悪によってホモエロティックとホモソーシャルな欲望を断絶し男同士の連帯を強化すると論じた。
- <sup>4</sup> 本節は、2017年3月名古屋大学大学院審査修士学位論文“*Through the borders: Finding Counter-Discourse in Japanese Women's Reception of Korean Idols*”の一部を再構成し、加筆訂正したものである。
- <sup>5</sup> ゆうま. [mugm99]. (2015, June 4). 具志堅用高以上にかわいいおっさんなんてこの世に存在するの??? [Tweet]. Retrieved from <https://twitter.com/mugm99/status/606665739307646977>
- <sup>6</sup> インターネット腐女子. [internetfujoshi]. (2016, January 6). 娘に結婚話を切り出されて一週間寝込んだじゃった具志堅用高かわいい、スコティッシュフールドと同じくらいかわいい [Tweet]. Retrieved from <https://twitter.com/internetfujoshi/status/684749899640881152>
- <sup>7</sup> mug. [wheat0909]. (2015, May 23). 具志堅用高はそこらへんのゆるキャラよりもずっとかわいい [Tweet]. Retrieved from <https://twitter.com/wheat0909/status/602066482151862272>

## References

- Beauvoir, S. (2013). 『老い上：新装版』. (朝吹三吉, Trans.). 京都: 人文書院. = (Original work published 1970). *La Vieillesse*. Paris: Éditions Gallimard.
- Boddy, K. (2011). 『ボクシングの文化史』. (松浪稔 & 月嶋紘之, Trans.). 東京: 東洋書林. = (Original work published 2008). *Boxing: A cultural history*. London: Reaktion Books.
- Butler, J. (2007). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York, NY: Routledge. (Original work published 1990)
- Butler, R. (1969). Ageism: Another form of bigotry. *The Gerontologist*, 9, 243
- Butler, R. & Herbert, P. G. (Eds.). (1998). 『プロダクティブ・エイジング』. (岡本祐三, Trans.). 東京: 日本評論社. =(Original work published 1985). *Productive aging: Enhancing vitality in later life*. New York, NY: Springer Publishing Company
- Cixous, H. (1993). 『メデューサの笑い』. (松本伊瑛子, 藤倉恵子, & 国領苑子, Trans.). 東京: 紀伊國屋書店. =(Original work published 1975). *Le rire de la Méduse et autres ironies*. Paris: Éditions Galilée.
- Foucault, M. (1986). 『性の歴史I—知への意志』. (渡辺守章, Trans.). 東京: 新潮社. *The history of sexuality: An introduction, volume I*. (R. Hurley, Trans.). New York: Vintage =(Original work published 1976). *l'Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Paris: Gallimard..
- Friedan, B. (1995). 『老いの泉・上』, (山本博子 & 寺沢恵美子, Trans.). 東京: 西村書店. (Original work published 1993).
- McVeigh, B. (2000). *Wearing ideology: State, schooling and self-presentation in Japan*. New York, NY: Berg.
- Sedgwick, E. K. (2001). 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』. (上原早苗 & 亀澤美由紀, Trans.). 名古屋: 名古屋大学出版会. =(Original work published 1985). *Between men: English literature and male homosocial desire*. New York: Columbia University Press.
- Spector-Mersel, G. (2006). Never-aging stories: Western hegemonic masculinity scripts. *Journal of Gender Studies*, 15 (1), 67-82.
- Tarzan. (2007). 7月25日号. マガジンハウス.
- 會澤まりえ & 大野実. (2010). 「かわいい文化の背景」In 『尚絅学院大学紀要』, 59, 23-34.

- 東園子. (2006). 「女同士の絆の認識論: <女性のホモソーシャリティ> 概念の可能性」. In 『性年報人間科学』. 27. 71-85.
- 阿部公彦. (2015). 『幼さという戦略(かわいい)と成熟の物語作法』. 東京: 朝日新聞出版.
- 有馬明恵. (2012). 「メディア社会を生きる女性たち」. In 国広陽子 (編), 『メディアとジェンダー』 (pp.245-264). 東京: 勁草書房.
- 上野千鶴子. (2005). 『老いる準備—介護することとされること』. 東京: 学陽書房.
- 岡井崇之. (2009). 「<男らしさ> はどうとらえられてきたのか—— <脱鎧論> を超えて」. In 宮台真司, 辻泉&岡井崇之 (編), 『「男らしさ」の快楽: ポピュラー文化からみたその実態』 (pp.20-45). 東京: 勁草書房.
- 北川公路. (2004). 「老年期のセクシュアリティ」. (駒澤大学心理学論集: KARP), 6, 61-66.
- 具志堅用高. (2015, January 25). 「具志堅用高が語るアスリート出身タレントの心得 (過去の栄光なんて捨てなきゃ)」. 『オリコンニュース』 . Retrieved August 30, 2017, from <http://www.oricon.co.jp/news/2047611/full/>
- 古賀令子. (2009). 『<かわいい> の帝国 モードとメディアと女の子たち』 . 東京: 青土社.
- . (2012). 「セーフカルチャーにみるジェンダー」. In 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ (編), 『ポップカルチャーとジェンダー』 (pp.59-74). 東京: 明石書店.
- 小林秀章. (2014, July 23) 「セーラー服おじさん 東京の日常に“変”が溶け込んだ理由」 . Retrieved August 30, 2017, from <https://jisin.jp/serial/%E3%82%A8%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%A1/jisin/10036?rf=2>
- . (2014, September 7) 「セーラー服おじさん、実はスゴイ人だった 特許・英語力・CNN」 . Retrieved August 30, 2017, from <https://withnews.jp/article/f0140907000qq0000000000000000W00o0401qq000010753A>
- 小松浩子, 野村美香, 岡光京子, 伊藤恵美子, 鈴木久美, & 南川雅子. (2001). 「老いと慢性病をもつことによる高齢者のセクシュアリティへの影響」. In 『聖路加看護学会誌』, 5(1), 41-50.
- 工藤保則. (2012). 「低炭素社会における<カワイイ文化>とその可能性に関する一考察」. In 『Zero Carbon Society 研究センター紀要』, 1, 49-58.
- . (2015). 『カワイイ社会・学: 成熟の先をデザインする』 . 西宮: 関西学院大学出版会.

- 篠原資明. (2010). 「かわいい」の構造」. In 『美學』 61(2), 151.
- 須長史生. (1999). 『ハゲを生きる』. 東京: 勁草書房.
- 多賀太. (2005). 「男性のエンパワーメント?—社会経済的変化と男性の〈危機〉」—. In 『国立女性教育会館研究紀要』 9, 39-50.
- 竹村和子. (2012). 『彼女は何を視ているのか 映像表象と欲望の深層』. 東京: 作品社.
- 西村美香. (2015). 「かわいい論試論」. 『明星大学研究紀要—人文学部』, 51, 133-136.
- 豊田則成 & 中込四郎. (1996). 「運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐる」. In 『体育学研究』, 41(3), 192-206.
- 内閣府. (2015). 平成28年版高齢社会白書 (全体版) (PDF形式). Retrieved from [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html)
- 増淵宗一. (1994). 『かわいい症候群』. 東京: 日本放送出版協会.
- 宮台真司, 石原英樹, & 大塚明子. (1993). 『サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』. 東京: PARCO 出版.
- 宮本直美. (2011). 「〈二流の国民〉と〈かわいい〉という規範」. In 千田有紀 (編). 『上野千鶴子に挑む』 (pp.88-109). 東京: 勁草書房.
- 諸井克秀. (2013). 「アイドルの彷徨い」. 同志社女子大学生生活科学, 47, 38-42.
- 吉田薫 & 田中共子. (2004). 「〈老い〉をめぐる認知—現代の〈老い〉観—」. In 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』, 17, 159-176.
- 吉田弘司. (2009). 「顔の魅力に及ばず幼児性の効果」. In 『比治山大学現代文化学部紀要』, 16, 105-111.
- 米村みゆき & 佐々木亜紀子 (編). (2008) 『〈介護小説〉の風景 高齢社会と文学』 東京: 森話社.
- 四方田犬彦. (2006). 『〈かわいい〉論』 [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon.com

**The *Kawaii* Survival Strategy for Middle-aged Men:  
Men's Aging from the Perspective of Feminist Gerontology  
Kako NAKAYAMA**

This paper discusses aged men's employment of *kawaii* discourse from the perspective of feminist gerontology.

First, the function of *kawaii* discourse is examined in the context of the Japanese society, based on previous research. Throughout the analysis, this paper points out that the effects of *kawaii* discourse place the "kawaii person" in a subordinate position within society, reinforcing the power relationship between dominant/powerful and submissive/powerless. This dominant/powerful-submissive/powerless relationship does not exclude other binary relations, notably the relationship between young and old. While previous studies analyzed gender relationships by positioning women on the *kawaii* side, my study focuses on the process of men employing *kawaii* practices.

By examining representations of the *Ojisan* (middle-aged man) in magazines and on the Internet, this paper clarifies how men become marginalized from the male homosocial relationship of the dominant class as they age. Moreover, this paper examines how the function of *kawaii* discourse toward aged men redefines their age in a positive manner, while denying aging itself. Through this examination, this paper concludes that men can overcome the negative aspects of ageing by interjecting *kawaii* discourse.

**Keywords:**

*Kawaii* discourse, Aging, Masculinity, Feminist cultural gerontology, Constructive ageing